

RYOBI.

本明朝-Book

プロを思わずうならせる書籍本文組み専用書体、満を持して新登場。

開発最高潮！

もうしばらくお待ちください。



リョービイマジクス株式会社 フォントシステム部

114-0003 東京都北区豊島5-2-8

phone: 03-5390-5830 facsimile: 03-3927-6397

<http://www.ryobi-group.co.jp/imagix/font/>

RYOBI.

TYPE COLLECTION
high quality digital typeface

本明朝
-Book

本明朝-Book 創世記 II

* 文中に記載されている会社名、製品名は各社の商標または登録商標です。

* 本明朝はリョービイメージス株式会社の登録商標です。

* この文書中の仕様は予告なしに変更されることがあります。

* 本書は組版工学研究会によって執筆・編集され、

白井敬尚形成事務所によってデザイン制作されました。

JANUARY 2004
PRINTED IN JAPAN

二一世紀の書籍本文組み専用書体の開発をめざして

一九九九年三月、ひとつの会議がリヨービマジクスフォントシステム部で開催された。

中心テーマは——これからわが国の本文用書体には何が求められるか——であった。

輝ける二一世紀という新世紀において、もしくは急速な変貌を続けるデジタル環境における次世代においても、やはりわが国の印刷用本文用書体の中心は当面は明朝体であろうとなつた。

つまり活字書体としての明朝体は明治初期の導入期をへて、急速な普及と普遍化と精緻化をみてきた活字書体であり、すでに読者の視覚にもっとも馴れた活字書体であるという歴史的な背景は軽視できなかつた。そしてまたリヨービにはもつとも評価の高い本明朝シリーズがあつた。これをさらに検証して精度と品質を向上させることが決定した。

これが来るべき新世紀とデジタル時代を見据えた、本格本文用新書体「本明朝・Book」開発のすべての起点となつた。

一、判別性と可読性を重視して、適度な黒みと安定感のある本格本文組み新書体の創造。

一、活字本来の柔軟性の再現のためにデジタル効果の過剰な露出を避けて、エレメントに人の手技としてのアナログの要素を取り込むこと。

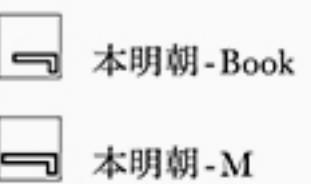
一、書籍と雑誌の本文用専用書体としての使途を意識すること。そのために句読点、括弧などの約物の位置や大きさを再検証すること。
一、縦組み用・横組み用の専用かな書体を開発すること。また高齢読者層の急増に備えてふりがな用のかな書体の新開発も重視すること。

一、和欧混植に際しては国際時代を迎えた本格的で多彩な組版の実現のために、従来の枠組みをこえてスマート・キャラップちいさな大文字や、オールド・スタイルノンライニング・フィギュアの数字、各種アクセント記号を備えた本格的な欧文書体を開発・導入して同梱をはかること。

同時にすこしでも奇異な形姿の登場を避けることや、独自の字体の解釈を避けることも決定した。新書体はあくまでも広範な読者からの評価のたかい本明朝シリーズを基盤として、単なるシリーズの拡張を超えて、読者にとって視覚に馴致した抵抗のないものであり、文字組版のプロフェッショナルを満足させるものであり、同時に充実したキャラクタの提供と、最新の組版環境への対応なども決定した。

ともするとわが国の代表的な本文用書体としての明朝体には、その使用範囲と役割分担があまりにも広範囲に設定されてきたきらいがあった。すなわち見出し用などの大きなサイズから、キャッシュションや地図のネームなどにまでおよぶ小さなサイズまでが共用できることや、縦組みにも横組みにも対応できることがもとめられてきた。

SMALL CAPITAL
0123456789



さらに明朝体には、宗教書・哲学書・小説や社会科学などの領域から、説明書・事務用書類・マニュアル類など実用書などにわたる、あまりにも広い範囲の伝達の役割を担わされてきたという歴史的な経過があった。

そうかといつてここに奇妙な事実も指摘しなくてはならない。これほどまでわたしたちの生活の周辺に密接な関係をもつていてる明朝体とはいえ、ほとんどの生活人は、だれも明朝体を描いたり、書いたりはできないのである。明朝体とはやはり宋の時代から中国の刊本を中心とした印刷物のなかで長い時間をかけて醸成された書物のための印刷専用書体であり、その造形をになったのはほんの一握りの工匠であったという歴史をわざることはできなかつた。

したがつて新構想による書籍本文組み専用の新書体「明朝・Book」の開発にあたつては、相当長期間にわたる歴史的経緯の再考察と、長時間にわたる会議を必要とした。

現在「明朝・Book」は開発の最高潮にある。その開発の熱い鼓動をここにふたたび記録する。

重層的かつ複合的な明朝・Bookの開発コンセプト

「明朝・Book」はあくまでも明朝シリーズのなかにある新書体として、その字体と形姿は既に先行して販売されている明朝シリーズと同一のものとして、広範な使途に応じた多様な選択に応じられるようにした。

そのウェイトと黒みは明朝・Lと明朝・Mのほぼ中間にいた。

また横線を幾分太め、ふところを幾分しづらつて、書体の形姿を再検討することによつて後述するダズリング・イフェクトの発生を防止した。また一部の漢字の字面の大小関係を検証して、ベタ組みでの安定感と紙面の解放感を獲得した。

その主な理由はいわゆる新印刷方式の登場と普及にあつた。つまりオンデマンド印刷や、製版フィルムを使わないCTP印刷などの普及によつて、従来の明朝体のウェイトでは書籍や雑誌の本文印刷においては細すぎたり太すぎるという傾向がみられたからである。

使用適性サイズはほぼ一一Qから一六Qの書籍や雑誌の本文用サイズとして設定した。これは少し説明が必要であろう。活字書体とは長らくの間視覚補整対応方式によつて造られてきたという歴史がある。すなわち金属活字の歴史のなかでは五五〇年余にわたつて、判別性と可読性の向上のために活字サイズの大小の変化に応じて、書体の基本デザインを変えずに、大きなサイズ

本	本	本	本	本	本
11q	12q	13q	14q	15q	16q
2.75mm	3mm	3.25mm	3.5mm	3.75mm	4mm
7.8pts	8.5pts	9.21pts	9.92pts	10.63pts	11.34pts

ではカウンターを狭めたり鋭角な線質をやわらげたりしてきた。また小さなサイズでは逆にカウンターを広げたり、線質を明瞭な構成に切り替えるなどして、それぞれの活字父型に視覚補整をほどこしながら彫刻・描画してきたという歴史があった。

それが一九世紀の後半になって機械式活字母型彫刻機の登場を見てから、急速に比例対応方式の活字書体設計法に変化した。この方式では一あるいはほんの少数のサイズの文字原図だけで、すべての活字サイズに一律に比例的な縮小または拡大をさせて対応する方式となつた。また光学式写真植字機はほとんどすべてがこの方式であり、現在の電子活字においても同様である。

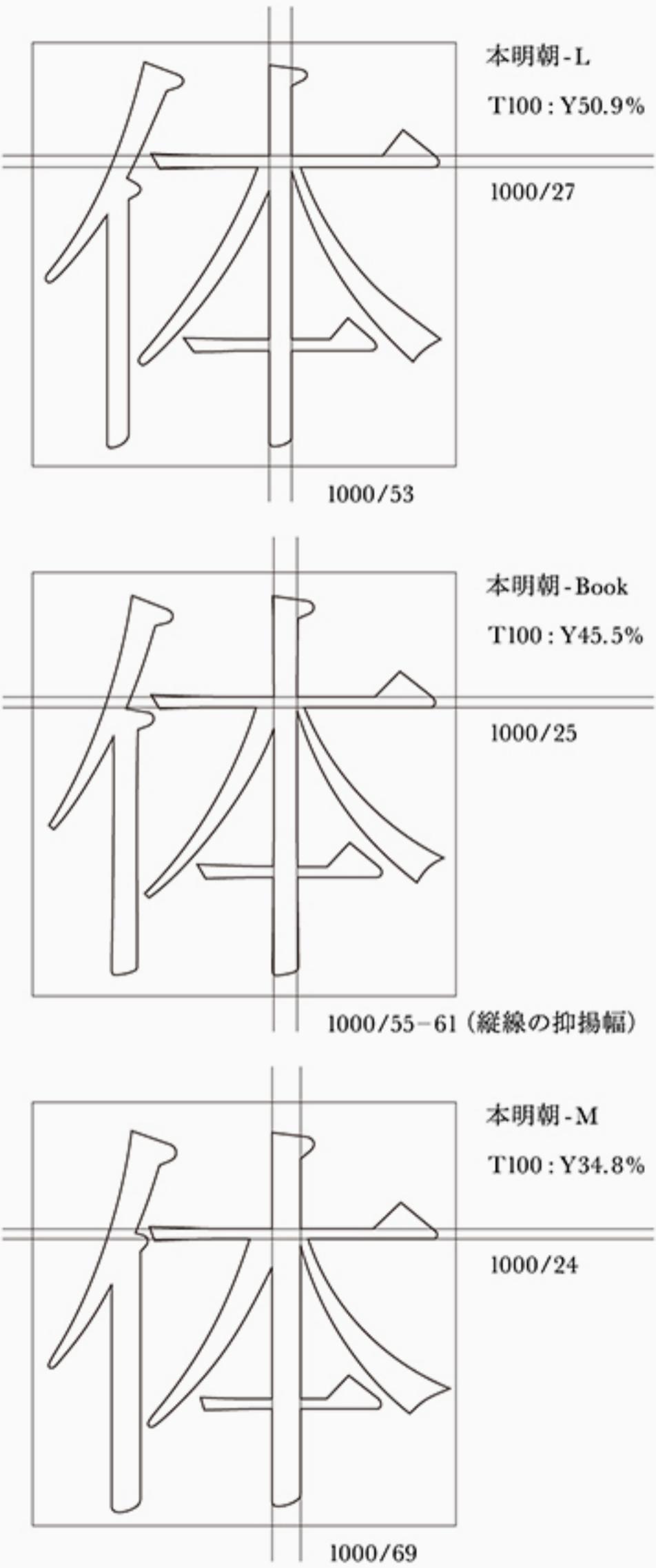
活字原図の比例対応方式には長所も多いが、やはり大きなサイズではカウンターがゆるくなつて間延びした文字形象となつたり、小さなサイズではカウンターが狭まつたり、細線部が不明瞭になつて判別性に劣ることがあつた。すなわち新開発の「本明朝・Book」においては、組版適性サイズを限定することによって、視覚補整対応方式——オプティカル・スケーリングを実現させたともいえた。

同時に「本明朝・Book」の開発に際してはダズリング・イフェクトの解消をつよく意識した。^{Dazzling Effect} ダズリング・イフェクトとは幻想効果のことであり、タイプグラフィ用語においては目がチカチカして読みづらいことをいう。

つまりこのダズリング・イフェクトとは、モダン・ローマンが登場してからの欧州のタイプグラフィ界においてはもつとも深刻な議論が交わされてきたテーマであり、わが国においては看過たく发生する幻惑効果への対応をわが国でははじめて試みたものである。

また組み方向は標準を縦組みとして、センターアー軸を中心に厳格な検証を加えた。すなわち快適されてきたテーマともいえた。

様式化されて硬質な線が際立ち、水平・垂直線の線の太さの差が大きく異なり、彫刻の特徴が過度なまでに際立つた硬質な画線がもたらす強いコントラスト、つまりモダン・ローマンと同様に、近代機械産業主義のもとで精緻化とモダナイズが極端に進行した、明朝体漢字全般に避けがたく发生する幻惑効果への対応をわが国でははじめて試みたものである。



図は全角を1000ユニットに分割したものを単位とした縦線と横線の比率を示している。また縦線Tと横線Yの比率もあわせて表記したが、この縦横比の差があるものほどコントラストがつよいことを示している。(当社比)

な読書を目指すには何よりもセンターブラウジングがすつきりと通り、揺らぎのない組版表情が安定感と信赖感をもたらすと判断された。書籍・雑誌の組版印刷や、読み物としての大量文書処理などの本文印刷用の市場にターゲットをしぼった前例のない電子活字を意識して開発に着手した。

横組みへの対応は、組版ソフトウェアなどのアプリケーション・ソフトの充実と展開によって、漢字書体の形姿は変えずに、おもにはかな書体の充実をもつて臨むことにした。すなわち「本明朝・Book」のかな書体は、標準がな、小がな、新がな、新小がなの四種類をあらたに設計した。またOpenTypeフォントでは、それぞれに中心軸を重視し、ひらがなとカタかなの大・小関係を厳格に設定した縦組み用と、ベースライン揃えを重視した横組み用を用意したので「本明朝・Book」には最終的には都合一二種類のかな書体があることになった。

当然プロポーショナル・ピッチ(いわゆるツメ組)の情報を持たせているので、アプリケーションのツメ組み機能によつて自動でツメができるという、組版のプロフェッショナルの要望を最大限取り込んだきわめて意欲的な開発となつた。

横組み用かな	縦組み用かな	小がな	標準がな
工	工	工	工

デジタルの創造力を支えるのは
頑固なアナログ魂です。

「左ハライは日本刀、右ハライは青竜刀にまとめよ」

「本明朝・Book」の基本骨格は本明朝・Mをベースとし、コンピュータ・スキルの支援によつて制作している。その作業の中で一部の漢字の字面の大小関係を検証して、ベタ組みでの安定感と紙面の解放感を獲得した。またかな書体にも工夫があつて、標準がなであつても、ひらがな・カタかなとも幾分小振りの設定になつていて。

リヨービイマジクスの前身、晃文堂にはいつからともなくこんな口承があつた。

「左ハライは日本刀、右ハライは青竜刀にまとめよ」

「本明朝・Book」にはこうした先輩からの口承が採用されて、金属活字から写植活字そして電子活字への移行の時代を経験してきたリヨービならではの工夫が随所にこらされる結果となつた。つまりデジタルとはいながらもアナログの長所を積極的に取り込んだ書体開発となつた。

すなわち左ハライの先端部は、フエンシングの刀のように細く長く抜けていく形姿や、振り払う形ではなくて、最後まで上部の画線のそり上がりを抑制しながら長く引いて日本刀のようにし、終筆は直角に切断した。これは使用サイズを限定したために大きなサイズへの配慮をしなくても

すむことになつたためで、本文用書体として画線の先端が視覚に突き刺さることを防止することを狙いとしている。

右ハライにも中国の青竜刀のように肉厚で力強く外側に払う形を選択した。これも紙面全体が白っぽくなつて、一部の画線のコントラストが際立つてダズリング・イフェクトが発生することを予防するためになされた結果である。同時にまた文字の重心が下に降りて安定感をもたらすことができるという配慮からなされたものである。

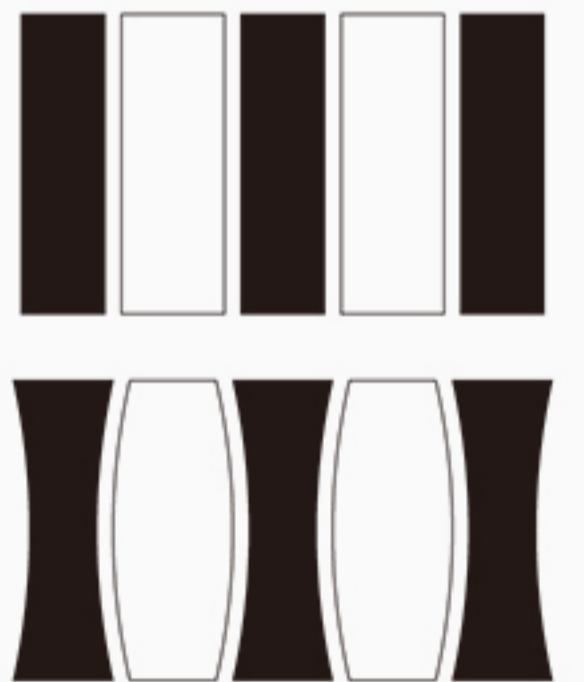
縦線の終筆部にも大きな工夫がなされている。それは読書における視覚にとつては、活字の縦線の画質は幾分異質であり、強く印象づけられるためになされている。つまりその終筆を直線にまとめてしまうと、人の目には扁平足のようにへこんでみえることへの対応としてなされている。「本明朝・Book」の縦線の終筆部はわずかに膨らみがあり、自然界のあちこちに見られるやさしいカーブを描いている。

このような微細な配慮と工夫を重ねて「本明朝・Book」の開発を進めた。すべての努力は快適な読書のために、そして快適な文字組版環境の提示のためになされている。ここで「本明朝・Book」はもはや電子活字であることはほとんど意識されていない。人が造り、人が組み上げ、人が読む——こうした環境への配慮にもとづいて開発が進行している。

本明朝・Bookの縦の線とその終筆の形状は、なだらかなカーブとなっている。(当社比)



柔軟な縦線は森の木立を連想させる。そこでは魅力的な自然のささやきが交わされている。



垂直線は空間を断ち切るように作用し、微妙なカーブの線質は優雅な調和をもたらす。

ユニヴァースの制作アドリアン・フルティガーは自著『活字の宇宙』の中で、読書をおだやかに支援する本文用書体への考察を記している。かれは上記の図版を引き合いに出しながら、機械や定規で垂直に描かれた線質は、文字の境界線が際立ち過ぎて相互に対立した存在となると指摘している。こうした原理は和文書体も同様で、書体には自然界の原理や書写という身体性が求められる。

本明朝の歴史

-
- 1958年 昭和33年
本明朝の源、金属活字「晃文堂明朝」が登場。
-
- 1960年 昭和35年
写植用書体「細明朝」として発売。
-
- 1982年 昭和57年
全面改刻して「本明朝-L」として発売。
-
- 1982年 昭和57年
ファミリーとして「本明朝-M」「本明朝-B」が誕生。
-
- 1983年 昭和58年
ファミリーとして「本明朝-E」が誕生。
-
- 1987年 昭和62年
「本明朝-B」を改刻して「本明朝-BII」と命名。
-
- 1987年 昭和62年
「本明朝-L」をデジタル化。
-
- 1990年 平成2年
「本明朝-M」「本明朝-BII」をデジタル化。
-
- 1994年 平成6年
「本明朝-E」を改刻して「本明朝-EII」デジタル化で誕生。
-
- 1999年 平成11年
本明朝ファミリーの字体・形姿を統一してリニューアル。
-
- 1999年 平成11年
「本明朝-L,-M」に新仮名「小がな、新がな、新小がな」誕生。
-
- 2002年 平成14年
「本明朝-BII,-EII」に新しい仮名「新がな」誕生。
-
- 2003年 平成15年
ファミリーとして「本明朝-U」が誕生。
-
- 2004年 平成16年
書籍本文組み専用書体「本明朝-Book」が誕生。